

## I スペードの女王 プーキン (露) 1834年

岩波文庫 神西 清 訳

近衛の騎兵士官トムスキーは、賭けかかるのが好きで、連夜にわたって賭け事をしていた。昨日も、祖母の伯爵夫人宅でほぼ徹夜だった。友人のスーリンとゲルマンを連れて、祖母宅を訪ねたトムスキーは、この祖母のことを思い出話の中から紹介しようと、いまからすれば意外なことだが、こういう武勇伝があった。――

祖母はもう80歳になるが、近時は、もうそんな賭け事からは離れているが、昔はよくしたもので、一度、オルアン公に大きく負けたことがある。それはかれこれ60年前のことだそう。祖母はそのことを夫に報告したのだが、夫というのはまったく妻には弱い一方、妻はすこぶる強かった。夫は激怒しただけでおしまいだった。まあともかく夫婦喧嘩は収まった。ところでこの負債のことだが、伯爵夫人はサン・ジェルマン伯爵に泣きついた。するとサン・ジェルマン伯爵は、「用立ては簡単ですが、大事なことは、勝負の負けは勝負で取り返すことです」と助言した。それができれば苦労はないと斜に構えて聞いていた夫人だったが、だが百戦錬磨のS伯爵の口説は神韻缥缈とした感があった。負けた伯爵夫人の続きを聞きたくなくなった。それは、「勝つための秘訣、数字の組み立て方から成ってこうすればいいのです、いいですか――」と語ろうとしたとき、トムスキーのそばにいたゲルマンが聞き耳を立てた。だが、このとき、ゲルマンは、その肝心要の「3つの数字の組み合わせ」を聞き取ることができなかった。トムスキーの、祖母に関する思い出話はもとに戻って、さて60年前の祖母は、その教えてもらった「3つの数字の組み合わせ」と翌日、ヴェルサイユ宮殿で王妃主催のかるた会で、オルアン公を相手にリターンマッチを試みたところ3連勝。すっかり負債を返し、まだおつりが来るほどだった。――トムスキーはそう話した。ところで、トムスキーは自分の伯父イワン・イリイチ伯爵のことも話した。この人も大負けが原因で亡くなったのだが、このときも祖母がやむをえず、賭け事がかつことによって、借財を清算させることができたようだ。祖母は心底、賭け事などするものではない、を信条としていた。――そんなことまでトムスキーは話した。

ゲルマンと呼ばれるこの男は工兵士官で、ドイツ出身だが、今はロシアに帰化している。彼はドイツ人気質をそのまま持っており、賭けごととは見るのは好きだが、それをするものではない、謹厳実直なものだ。だが、ロシアの地で平民として生きていこうと思えば、お金が必要であるから、お金への執着心は大きかった。彼の日々の自省の句は、「節約、節制、勤勉、これが自分にとって、最強の3枚のカード」だった。ここまで自己の信条を確固としているゲルマンなのに、今日のトムスキーの話聞いて、「3つの数字の組み合わせ」が気になった。いま、この家の伯爵夫人には、養女のリザベータ・イワノヴナと3人の夫人つきの侍女がいる。リースも侍女と同じように扱われており、夫人にすれば、リースはいつものろまで、気が利かないとの苦情が耐えなかった。さてそれから2日たって、この伯爵夫人の家で舞踏会が開かれた。トムスキーは、祖母に頼んでナルモフという友人の近衛士官をこの舞踏会に招待していた。祖母は祖母で気まぐれ的に、リースや3人の侍女らに、用事を言いつけ

ていた。祖母伯爵夫人は、公爵パーヴェル・アレクサンドロヴィッチから借りてきた本を、リースに音読させていたが、それが面白くなかったので、早々にやめさせた。とかく伯爵夫人は気まぐれで、ケチで、我執が強かった。威厳をたもとうとは独り勢威をはるが、誰もまともに相手にしなかった。そういう意味では、もはや伯爵夫人は何十年もこの屋敷の置物みたいなものだった。ただ、リースや3人の侍女らに身仕舞いを整えて貰うのが人との接点だった。だからリースにとっては、大方の時間は、窓辺に腰掛けて刺繍架に向っているのが多かった。リースがいつもどおり窓辺にいと、往来に工兵士官のゲルマンの姿を見つけた。

それから2日後、伯爵夫人とリースが馬車に乗って出かけようとしていたとき、ゲルマンもここにきていた。リースにすればこうも何度もゲルマンの姿と笑顔を見ると、彼女の方も、彼を見かけることにわくわくとして期待を感じるようになっていた。そこに居たトムスキーが、ゲルマンを伯爵夫人に紹介した(彼は幾度かトムスキーに連れられてここに来ているが)

ところで、ゲルマンはどこへいっても儉約家である。彼は時代の中で生きていくにあたって、ナポレオンにあこがれているところがあった。彼はこの、空想と現実が混在したようなこのペテルブルグの幻想空間の中にあって、自分の生き方の信条、例の3枚の勝ちカードのことを歩きながらも自己に言い聞かせた。――「これこそ俺の身代を築き上げるどころか七層倍にもして、安楽と独立をもたらしものなのだ」(同 p25)と。

ゲルマンはその夜、夢を見た。およそ自分が避けてきたかるた遊びをして、それで大勝ちしているのだ。倍賭けの連続で巨万の富を手中にしたが、その直後に夢がさめて、その富は消えてしまっていた。彼は自分の運命のことで決意した。――賭け事で儲けてやろう！

馬の用意をするリースの前に、ゲルマンがやってきた。彼は一通の手紙を彼女ににぎらせて帰っていった。伯爵夫人が、いまは誰？と訊いたが、彼女の答えは上の空だった。伯爵夫人は怒った。仕事が終わって自分の部屋に駆け込んだリースはそれをわくわくして開けた。だがそれはドイツ語で書かれてあり、彼女は読めなかった。リースとすればどうすべきか――彼女はひとまずこれをお返ししよう、と結論付けた。そしてそれから数日後、またゲルマンが窓辺にやってきたときにリースは彼の手紙と自分の走り書きを、往来めがけて投げた。彼はそれを拾って帰っていった。それでも彼の試みは続いたが、彼女は、いつしかそんなやり取りに酔ったようになり、「次の舞踏会にて」の意を伝えた。約束の時刻は午後11時半だった。彼女が手紙で予め示した屋敷内の廊下、階段、小部屋、物陰をすり抜けて、ゲルマンは部屋へ進入した。そして最後は、伯爵夫人の寝所にまで入り込んだ。やがて馬車の音が聞こえ、人の気配が近づいてきた。彼は鏡台の影に隠れ、息をひそめていた。伯爵夫人は着替えて寝床についた。やがてゲルマンは伯爵夫人の前に立った。だが、伯爵夫人は何も動じたふうもなく、彼の顔を覗き込んだ。ゲルマンは、「お願いがあつてまいりました。3枚のカードの組み合わせを教えてください」彼女は、「あれは笑談です」と答えた。問答は続いたが、彼女は無言になってしまった。ゲルマンが已むなくポケットから拳銃を引き出すと、彼女は反り返って倒れた。死んでいた。伯爵夫人の死を知ったリースは、このゲルマンは呵責に苛まれているのだろうと思った。そして彼に梯子の位置を教え、彼に出ていってもらった。その日のうちに伯爵夫人の葬儀が営まれた。ゲルマンはそれに出席した。というも、悔やむ心はなくても、「老婆殺し」と繰り

返す心の声が収まらなかったからだ。会葬者が死んだ人物がすでに大分の高齢者であるところから今さら涙を流す人は少なく、棺に最後の別れをした本人の友人が独り本人の顔にキスしたときくらいだった。その他の会葬者のなかにゲルマンはいたが、彼は老婆の顔をさっと見たただけだが、そのとき、死人の老婆が片目をしばたいて嘲りの一瞥をゲルマンに与えたような気がゲルマンには思えた。ゲルマンはおもわず後退り、床に倒れこんだ。

彼はそのまま家に帰ったが、夜は早々に床についた。その深夜のこと、彼は廊下に人の気配を感じた。それは彼のベッド際にまでやってきた。白衣の婦人だった。『枕辺に立ったのは、まごう方ない伯爵夫人だった』同 p50 伯爵夫人は、ゲルマンに向って「ここに来るのは本意ではなかったけれど、この願いを叶えさせてやれとの仰せがあったので、」と静かに語った。そして、ゲルマンがどうしても聞きたかった、「絶対勝てる数字」のことで、それは、3(トロイカ)、7(セヨルキカ)、1(トウス)の順で張れば必ず勝てる」という内容だった。彼女は、それからゲルマンに注意を与えた。「ただ一夜に一枚だけしか張ってはならない。誓って死ぬまでふたたびかるたを手にしてはなりませんよ」、それから、「また、リーズを嫁にもらうのなら、私をあやめた咎は消してあげましょう」同 p50 と言い、やがて姿を消していった。「3」は大輪の花、「7」はゴチック式の門、「1」は女郎蜘蛛となって、彼に夢を広げた。当時モスクワに名だたるかるた師がいた。名をチェカリスキーというのだが、これがペテルブルグにやってきていた。当地でも荒稼ぎをしていく目的だった。そのことを知ったナルモフが、ゲルマンを彼の張っている賭場につれていった。

ゲルマンは、無敵の魔法を心得ていたから、余裕綽綽で入っていった。おもむろに彼と対座した。さて、「いかほどから？」の彼の問いに、ゲルマンはいきなり47,000ルーブリと答えた。チェカリスキーは、ちょっと構えてしまい、それは高すぎます。ここでの最高は、275ルーブリです。そんな二人のやりとりで周囲の客はいっせいに二人に向けられた。そしてチェカリスキーはもう一つつけくわえた。それは、賭け金は現金であること、だった。だが、ゲルマンは現金に替わって手形ではどうか、と言い、それで手形でもよしということになった。さて勝負は、自分の張ったかるたと、元締め配ったかるたが一致すれば勝ちという単純なものだ。最初にゲルマンは「3」を裏返して張った。元締めは右(自分)に「1」、左(ゲルマン)に「3」を配った。ゲルマンの勝ちだった。場がうなり声を上げた。大金ゆえに元締め自身もやや動揺した。次も同じ要領で47,000ルーブリが賭け金となった。そして出た札は、ゲルマンの「7」のとおりだった。会場はまたも大きなうなり声がおこった。さすがに元締のチェカリスキーの顔に脂汗がにじんでいた。

ゲルマンの前夜の大勝はたちまちペテルブルグ中に伝わった。翌日、またもゲルマンはチェカリスキーの店にやってきた。すでにここには一國の大將軍や顧問といったお歴々が、今夜の勝負を見ようとして集まってきていた。チェカリスキーも今夜は満を持して構えていた。そして勝負は始まり、ゲルマンは昨日のよいに、「3」、「7」と張って勝ちすすんだ。さて最後の勝負となった。彼は当然、「1」と張った。そして元締めのコールは、やはり「1」だった。ゲルマンは「やった！」と快哉をあげた。そのときだった。チェカリスキーが、「いや、「女王」(ダマ)のほうが負けと存じますが――」と申し立てた。ゲルマンはその意味がわからなかった。彼はあわてて自分の手札を裏返してみた。それは、張ったはずの「1」ではなく、「ダマ」(女王)だった。彼は思った

札を取りまちがえて、張っていたのだ。ゲルマンの負けだった。そのとき、**そのスパートの女王札は、ゲルマンに眼をほそめてほほ笑んだようにゲルマンには感じられた。**ゲルマンは、悚然として、「あいつだ！」と眼をすえて叫んだ。

さてその後のことだが、ゲルマンは気が狂ってオブホーフの精神病院に入っている。リーズは、気立ての優しい青年と結婚して相応の暮らしをしていた。この青年というのは、伯爵夫人の家で家令をしていた男の息子だった。ついでに言えば、リーズの結婚でできた子ども以外に、ゲルマンらは、貧しい縁者の子を養子として受け入れ、それを気に留めなかった。トムスキーはポーリン姫と結婚したそうだった。

## II 「リア王」 シェイクスピア (英) 1605年頃

岩波文庫 斎藤 勇 訳

[第1幕]

ブリテンのリア王は、領土を三人の娘に分け与えようとした。それにあって、娘たちが自分のことをどれほど親身に思っているかを確かめようとした。長女のゴネリルも次女のリーガンも、心にもない飾り立てた言葉を連発したが、三女のコーデリアは、心底父を本当に大切に思っていたのに、下心の見えすいた飾り立てた言葉が言えない。\*① リア王は怒って、家臣ケント公の忠言を無視して、コーデリアをフランス国王に縁づかせ追放した。一方、姉二人とその夫たち(オールバニ公、コーンウォール公)は相続を受けた。

\*① 彼女は、姉二人の父への裏切りを見抜いた。そして「**不適合なことにわたくしは真心を口先まで持ち出すことができません**」と言い切る。 同 p18

[名セリフ] Unhappy that I am, I can not heave my heart into my mouth.

コーデリアから、さらに「言うべき言葉はありません※」と返答されたリア王は、慨嘆して語る。――「何もないところからは何も生まれぬ」 Nothing can come of nothing.

※ コーデリアは、論語の「巧言令色鮮し仁」という意思表示の流儀の人だった。

[第2幕]

リア王は、ゴネリル・アルバニー夫婦のもとで厄介者扱いを受けます(ゴネリルはリア王お抱えの騎士を減らし、リーガンはリア王を避けた) ところで、グロスターの長男エドガーは正妻の子で、次男エドモンドは愛人の子。このことで、エドモンドはいつか兄を陥れようと企んでいた。彼は、兄が父殺害を企むとの偽手紙を自分で勝手に作ったり、自分の腕に刀傷をつけて、これが兄の自分を殺害しようとした時の証拠だと言ったり、ありもしないことを吹聴した。グロスターは、兄を勘当し、弟に領地すべての相続権を与えた。そしてリーガンの夫コーンウォールは、この弟エドモンドを召し抱えた。ゴネリルとリーガンは、いよいよ父リア王を邪魔者扱いにし、リア王は失望の極みとなった。

[第3幕]

リア王は、長女・次女の魂胆に失望し、彼らの城を出て嵐の中、道化とともに荒野をさま



よった末、元の家臣ケントに救われます。グロスターはリア王に、長女・次女に反逆するようエドマンドに持ちかけたが(グロスターは、二人の思惑を知らなかった)、エドマンドはそのことを二人に知らせた。そこにはエドガーもいた(エドガーは自らトムと名乗り狂人を装っていた。しかし、このトムなる人物がエドガーであることに、父親グロスターでさえも気づいていない)。グロスターは、弟エドマンドが父を裏切り兄を追放したことで、エドマンドに騙されたことに気づいた。グロスターは、リア王をフランスへの橋頭保ドーバー(娘コーデリアにいたフランスに近いだろうから)へ逃がすようにし、同時にフランスにいるコーデリアにリア王の窮状を知らせた。グロスターは、狂気の増してくるリア王らを、より安全な農家へと案内した。しかし、それでも、リーガンらに見つかることをおそれ、フランスに近いドーバーまでやってきた。やがてコーデリアのフランス軍が、リア王たちを助けるためにドーバーまでやってきた。ところが、ここでグロスターは息子エドマンドの手引きでとらえられ、ゴネリルとリーガンのもとへ連れて行かれ、目をくりぬかれてしまった。一方、エドマンドはアルバニーのもとで、コーデリア軍と闘うための準備をする。

#### [第4幕]

目の見えないグロスターは荒野をさまよっていたが、エドガーに発見され、助けられた(このときエドガーは自らトムと名乗っておくことにした)。そして、自分をドーバーへ案内してくれと頼む。\*①。グロスターはドーバーの農家で、ようやくリア王に会うことができたが、リア王もまた自分の身の不運を嘆き、世を怨んでいた\*②。

長女ゴネリルの夫アルバニーは、妻、リーガン、コーンウォール、エドマンドの所業を人間の良心から非難する。折しも、コーンウォール(リーガンの夫)は、その非道さから召使によって殺害されたとの知らせが入った。エドガー(トム)はグロスターをドーバーの断崖の上に案内した(彼がそこから飛び降りて死にたいとの要望に従うため)。しかし、エドガーは、実際には身投げを許さず、あたかも自ら身投げしたと錯覚させたようにしたうえで、(たまたま通りかかった別人間になりきって) 父グロスターを励まし、生きる勇気確かめ合った\*③

\*① エドガーは狂人を装わねばならない逆境の自分を鼓舞する。(エドガー)「**最悪だと**  
**言っているうちは最悪ではない**」 同 p165

And worse I may be yet: the worst is not so long as we can say 'This is the worst.

\*② (リア) **馬鹿者ぞろいのこの大舞台に出てきたことを泣く。** 同 p199

When we are born, we cry that we are come to this great stage of fools.

\*③ (グロスター)「あなたはどこのだれ？」 (エドガー)「**まったくつまらん者です—**  
**数々の悲しみを知りもし感じもしましたので、思いやりの心があつくなった者です。**」  
同 p202

A most poor man, made tame to fortune's blows, who, by the art of known and feeling sorrows, am pregnant to good pity.

エドマンドは、夫コーンウォールを殺害されてしまった妻のリーガンに近づき、愛の手紙をお

くり、夫の軍隊の指揮権を奪った。また、エドマンドはゴネリルにも手紙を送っており、夫アルバニーを殺害したあと結婚しようというものだった。リアの姿はゴネリルの軍の者に見つかった。ゴネリルの従者オズワルドが登場し、エドガーともみ合った末殺害されてしまったが、このときオズワルドの財布にあつて手紙が見つかった。それはゴネリルからの手紙で、さきにエドマンドからもらつての返事だった。エドガーがそれを読んだところ、ゴネリルはエドマンドからの誘いに応じるとの内容だった。エドガーはその内容を、彼女の夫アルバニーに知らせた。コーデリアはフランス軍を指揮しドーバーを越えて、ブリテンに乗り込んだが、エドマンド軍に、リア王ともども捕えられてしまった。獄中でリア王とコーデリアは和解をすることができた。

#### [第5幕]

ドーバー近くのブリテン軍の中では、リーガンはエドマンドに自分か姉(ゴネリル)かいずれをとるか迫っていた。そこへ、アルバニーがやってきた。手紙に示された内容で、3人(アルバニー、姉ゴネリル夫婦と妹リーガン)が争いました。その後、妹リーガンは姉ゴネリルの杯に毒を盛った。

もはや王権は誰にあるのかすら分からなくなってしまっていた。面目を失ったアルバニーは、エドマンドとエドガーをして互いに決闘で決着をつけるよう促した。この決闘中、リーガンはこの場を離れ自殺した。姉ゴネリルと妹リーガンの遺骸を前にして、夫アルバニーは、「天上の判決は我々を震えあがらせるだろう」と言うのが精いっぱいだった。ところで、勝敗は、エドマンドは、エドガーから致命傷を負わせられたが、絶命寸前のエドマンドは、せめてもの善意として、「ついさっき、リア王とコーデリアの処刑執行命令をだしたところだ。助けたければ今から追っ掛けることだ」と白状した。エドガーは、慌てて兵士に執行中止の伝令を命じたが、結果は、リア王の命は助かったが、コーデリアについては既に執行がすすんでいた。

#### ●道化の出るシーン

##### 『十二夜』(シェイクスピア)

弟から国を追放されてローランド前公爵はいまアーデンの森に暮らしている。現公爵フレデリック主催のレスリング大会を開いたが、諸国遍歴中の兄弟(兄:オリヴァーと弟:オーランド)のうちの弟がそれに出場し、現公爵お抱えの選手を破って優勝した。現公爵は前公爵の娘(自身の姪)ロザリンドを養っていたが、オーランドとロザリンド愛し合うようになったので、それへの憤懣からロザリンドを追放処分にした。この処置への義憤から、現公爵の娘シーリアも、ロザリンドとともに、また道化師タッチストーンを連れて、国を出、アーデンの森に向かった。-----最後は、オリヴァーはシーリアと、オーランドはロザリンドと、めでたく結ばれる。

##### 『長靴をはいた牡猫』(テイク)

貧乏一家の三男が遺産相続にもらったのは、異能を隠し持った猫1匹。この猫が、主人の出世のために、才覚をフル動員して活躍する。長靴だけは自己負担してもらい、お城に乗り込んで、城の重臣はもとより、主人に注目があつまるようにする。場内宴会の場では、隣りにいた道化師と渡り合い、主人が人格高潔の人物となるように仕向ける。-----最後は、自分の主人を、“カラバ公爵”に仕立て上げ、姫との縁組を成功させる。

### Ⅲ 「ボヴァリー夫人」 フローベル (仏) 1856年

岩波文庫 伊吹武彦 訳

#### ○ストーリー

軍医補の息子シャルル・ボヴァリーという15歳の少年が転校してきた。彼はまじめに勉強し、両親から期待されるままに医学校に入れた。彼は何とか医者になれた。そして、親の斡旋でノルマンディーのトストという町で医師稼業を始めた。親はさらに息子のために女房候補を探してきた。執達吏の未亡人で年齢は四十代半ばだが、持参金があるというのに惚れこんで連れてきたもの。シャルルはそのまま結婚した。夫婦生活では女房の尻に敷かれているが、それもまた気楽に平々凡々とした生活をしてきた。『シャルルの話は歩道のように平板で、そこには月並みな思想が、感動も笑いも夢もそらずに、普段着のまままでぞろぞろ歩いていた』

ある晩、遠方ベルトーの町のルオーという農家の主人が骨折したので治療して欲しいとの要請を受け、出かけていった。治療はしたが、娘エンマが美しかったので、シャルル医師は毎週、ルオー宅を訪ねた。すると医師の女房はそれを怪しんだ。しかし、その後シャルルの女房は急死した。そこで、シャルルはエンマと再婚した。

エンマは、もともとロマンチックな空想に耽るのが好きで、むかしある侯爵家のパーティーに招かれて以来、派手な都会生活に憧れを抱き、自分を不幸な人間と見るようになった。単調な田舎暮らしの中で、彼女はピアノを弾いたり、絵を描いたりしたが、それでも飽き足りなさをおぼえた。妻の心の変調に、夫シャルルはルーアンから8里にあるヨンヴィルの町に移った。金獅子旅館の近くに医院を開業した。真向かいにはオマーという薬剤師の経営する薬局があった。薬局の一室にはレオンという、公証人の書記をしている青年が下宿していた。やがてエンマはこのレオンと恋に落ちた。しばし陶酔を味わったが、所詮、華やかさはない。そういう不満をおぼえる中、レオンは法学を学びたいと決意し、ルーアンの町へ行ってしまった。エンマは無気力になってしまった。一方、近所の地主で資産家のロドルフという人物が、雇人に瀉血を施してくれと頼んできた。エンマの美しさに引かれたロドルフは、年齢34歳、収入15,000フランで資産家だ。村のある会合時、人の目を盗んでエンマに迫った。彼女は乗馬に誘われやがて森の中で関係を持ってしまった。

ところで、夫のシャルルだが、薬剤師オマーが外科診療もやってみたらと勧めてきた。そこである患者を診たが、医療ミスを起こしてしまい、患者は義足をつけなければならなくなった。商人のルウルーから義足を調達したが、エンマは夫の能力の低さに落胆した。ところで、ロドルフはエンマをただの遊び相手としか考えておらず、エンマは墮落をしようと持ちかけても、彼はドタキャン。エンマはまた恋の空振りを味わった。まったくしょ気かえった彼女の様子に、理由が分からないままの夫シャルルは健気に43日間も看病し、その後は彼はエンマをルーアンの劇場へ観劇に連れていった。

何とその劇場でエンマはレオンの挨拶を受けた。3年ぶりだった。これはエンマの無気力を十分に埋め合わせた。それ以来レオンと逢瀬を重ねた。当然お金がかかったが、それは商人ルウルーのもとで彼女の負担として記帳されていた。レオンは以前の朴訥な青年から一皮むけた男になっていた。しかし、“恋に恋している”女とは長くは付き合いきれず静かに去った。

彼女の借財は膨れ上がり、裁判所からの督促状でそれが8,000フランになっているのに気づいた。夫に知られずこれを解決するには、当面は3,000フランが要る。それを工面しようとロドルフや公証人モレル氏らをたずねたが駄目だった。彼女は自分で自分が衰れに思えた。そして、ついにオマーの所で調達した砒素を飲んで自殺した。シャルルは、娘ベルトの世話をするだけの生活となった。この一方で、オマーは着実に稼業を行い、裕福となり、勲章を貰うまでになった。

#### ある感想

これは教訓小説ではない。登場する人物は何処にでもいるような人ばかり。そして、その行動の動機も特異なものではなく、下心と欲得と見栄と偽善の結果が並べられただけのものだ。エンマ以外は皆、それぞれの領域で自分や周囲の人たちの現実の利益のために動いている。ただエンマだけが、夢想と無気力と一途な賭けに走っている。典型的な例は、薬剤師のオマーである。彼は小市民で善人なのだ。エンマのアバンチュールやそれを知らない夫シャルルのために、同情を寄せているのだ。

一方で、似而非研究室で、自己満足生活をし、究極的には勲章を欲しがる人間ではあるが。本作では人の内面の造型が細かすぎるほどに記述されている。その特徴を以てフローベルは“リアリズム”小説家と呼ばれたが、本人は不本意だったよう。おそらく、奇を衒ってではなく、下心と欲得と見栄と偽善のなせる結果をただ書きたかっただけではないのか。



#### 登場人物

- シャルル 医師(田舎から→ルーアンへ引っ越す)
- エロイーズ シャルルが親にすすめられるままに結婚した最初の妻
- ルオー ベルトーの町の農家
- エンマ ルオーの娘
- ベルト エンマの娘
- ヴォビエサール 侯爵
- ルフランソワ 金獅子旅館のおかみ
- イポリット 金獅子旅館の馬丁 (脚の手術をシャルルにしてもらう)
- レオン 公証人の書記、エンマの恋人
- ルウルー 服屋、エンマの御用達
- ロドルフ 似而非紳士、資産家の地主
- オマー シャルル医師の近所の薬局経営者



## Ⅳ 「片恋」 ツルゲーネフ（露） 1860年

二葉亭四迷訳 明治29年

### 登場人物

- 私 ドイツを旅しているロシア人
- ガギン 旅のロシア人
- アーシャ ガギンの妹（アンネットとも）
- フ라우・ルイゼ ガギン、アーシャの宿の近所の老婆

### ○ストーリー

20年以上も前、私が25歳くらいのとき、時間的にも余裕ができたので、外国を旅した。場所はドイツ、まずドレスデンで美術館を見て回った。見ているうちにわかったのだが、私はこういう動かぬ美よりも、人間観察の方が面白いということに気がついた。それからライン川左岸の町に逗留した。その街のある亭主を亡くした女性と近付きになれたが、あとから海軍大尉とやらの屈強の男が出てきて、私はひどい目にあつた。気を取りなおして川岸の遊歩道を歩いたが、川浪や向こう岸の景色は実に美しかった。どこからともなくワルツが聞こえてきた。それはあるホテルの庭で学生らがコンメルシ（学生の騒がしい宴会）を開いていたからだった。その学生の輪の中から、ロシア語が聞こえてきた。少し興味が起こつたので、その声の方向に向かっていくと、二人の人物にたどりついた。私は彼らに挨拶をした。ガギンという姓の青年とその妹でアーシャという丸顔のやや浅黒い顔をした美しい娘だった。会話をして打ち解けた後、ガギンは私を彼らの逗留している宿に招いてくれた。川の向こうの小高い丘の上にある瀟洒な一軒家で、これを選んだのはアーシャの好みからだったとのことを、すっかり打ち解けたアーシャから聞いた。見晴らしがよく葡萄畑が広がっている。うす紫色に染まりだした景色を眺めていて、私はそろそろ自分の宿に戻ろうとした。ガギンは私が別れが惜しく感じられているのを察知したのか、明日もぜひ来てほしいと誘ってくれた。

翌朝、ガギンの方が私の宿にやってきた。彼は私に画帳を見せた。彼は絵を趣味で描いているだけでも暮らしは成り立っているほどに裕福なようで、ただ、その作品はどれも未完のままだった。私たちは町はずれの城址に出かけた。そこにはちょうどアーシャが来ており、高い塀のそばでうずくまって遊んでいた。茶店で、私たちはビールを飲んだし、アーシャはこのあたりは馴れたもので茶店のおばあさんともなじみの会話をしていた。アーシャはやがて高い壁の迫った急峻な原を器用に敏捷に登っていった。まるでお転婆娘のようだった。アーシャはそこで遊ぶだけでは物足りず、今度は、別のなじみのルイゼおばさんの家に出かけていった。万事、天真爛漫に振舞っていた。

その後二週間たった。私はこの間ずっと彼らと付き合ったが、私にはアーシャがガギンの妹のように思えなかった。というのは、ガギンがロシアの富裕な商人のように優雅で温和な所作をとっているのに対し、アーシャはまったく落ち着きがなかったからだ。同じ家庭で育った人には思えなかった。アーシャは家には静かに本を読んでいたが、私が「えらいね 勉強かい？」と言

葉をかけると、それに反発することもあった。一方で、私がガギンのために、ゲーテの「ヘルマンとドロテア」を読んでやっていると、アーシャは急にドロテアのような大人のような感じでふるまうこともあった。ただ、彼らは私の視界から離れたところでは、恋人のようにしている場面もあったようで、私にはそれが不思議で、それを感じてからは彼らから距離をおくことにした。すると、ガギンが私の胸のうちを察知して、私を訪ねてきて、アーシャのいいことを話し出した。それはこういうものだった——アーシャはガギンの妹といっても腹違いの妹だった。ガギンの母親は、ガギンを生んで半年後に亡くなった。父親はそれを機に、家政婦タチヤーナを連れて田舎に引っ込んだ。しかしガギンが成長してからは、息子まで田舎暮らしではまずいだろうと考えた叔父の勧めで、ガギンはペテルブルグの下士学校に入れられた、その後、タチヤーナは父親といっしょになり、アーシャが生まれた。やがて父親も亡くなったので、ガギンとアーシャはしばらく外国を見てこようと思い、旅行に出かけることにし、こうして私と出会ったというものだった。その後、私はガギンに誘われ、彼らの家をまた訪ねていった。最初、アーシャはやや冷たい印象を漂わせていたが、兄に私と散歩してはと促されたからは、やや快活さを取り戻したようだった。私は彼女がいじらしく思えた。アーシャは『私の顔を流眇を見て、「淋しい御座んしたわ、」と答えへるより早く、「山は好い御座んしたか？」と——』と私に気をつかった物言いになっていた。アーシャは「貴君は今日は憤って居らした」、「真個(ほんど)に帰って来て好かった」と言葉を私に連発した。

アーシャは、私が先日彼女にプーシキンのオネーギンを読んでやったので、今日もまたロシアの詩集を読んで欲しいと所望した。私は手持ち無沙汰から、ラインのローレライの景色を見て「ああ、佳い景色だ！」と言うと、アーシャは「真個(ほんど)に佳い景色ですねえ。私達も若し鳥だったら。舞上ったり、飛でいったり——あんなに蒼空に消えて了ったり——快いでせうねえ-」と嘆息した。私は「人にだって羽が生えることがありますさ」と答えた。私がワルツを踊ろうかと誘うと、アーシャもその気になり、それじゃあと家に帰ってワルツを踊った。アーシャの柔らかい息遣いが感じられた。彼女は青ざめてはいたけれど、巻髪は彼女の快活な顔をなで、彼女の目はほとんど閉じかかるようだった。

3人は子どものようにたわむれた、ラインの船に乗ると兩岸の鳥の声が聞こえてきて本当にのんびりとして、船頭はまだろみの中にすらあるようだった。その後も3人は、生活の多くの時間を共有した。ガギンが絵を描いている傍らで、アーシャはどこまでも無邪気で優しくかった。あるとき、アーシャはこう私にたずねた。「ひょっとして私が死んだら、可哀そうだと思ってくれますか？」何をいきなりたずねるのかと、私は驚いたが、さらに彼女が言うには、「私は、あなたが私のことを運葉で軽い女、何か隔たりのある人間と見ているのではないかと恐れているんです。私のことを見ないでお付き合いして下さいませんか？」私がそれを取りこし苦勞では、と軽く慰めるとアーシャは「私のことを軽蔑しているのね」とちょっと怨み顔になった。ガギンが「またワルツを踊ろうか」と水を入れた。その日以降は、私は彼女と距離をたもつことにした。すると、今度はある使いの少年がアーシャからの手紙を持ってきた。それには、今日の午後4時に城址道のところでお会いし、お話しをしたい」というものだった。私は応じることにした。ところが、その前にガギンが私を訪ねてきた。その用件は、妹アーシャが明らかに私に恋をしており、私の意中を伺いたかったようなのだが、ともかく夕方に会うことになっていることだけを話した。私がラインの岸辺にいる

とまたあの使いの少年が私を待っていたようで、私にアーシャからの手紙を渡してくれた、会う場所を、城跡道から、フラウ・ルイゼの家に變えたいというのだった。そこで言われたとおりにいくと、もう、フラウ・ルイゼは委細承知とばかり、私を3階の狭い部屋にいくよう案内した。へんに笑顔を含んでいた。

私とその部屋に入ると、彼女はドアに背をむけ、窓の外を向いて小刻みにふるえていたようだ。「あの、私は――」というだけで、あとはにっこりとしていたが、顔は青ざめていた。「アンナ・ニコラーエブナ――」と私は彼女の正式の名前を呼んだ。

だが、二の句が続かなかった。彼女は涙を呑みこむようにして息を整えつつ祈るような、頼るような目つきで身をも心をも投げ出していった。彼女の震える手先が髪にふれたようだ。アーシャの顔に恐怖の色はなく。うっとりとしているようだった。口は少し開いて、額は大理石のように輝いていた。握っていた手を引き寄せると、体は寄り添ってしまった。彼女のショールは肩からすべりおちて、首はそっと私の胸元へ、もえるばかりに熱くなった唇の先へ来た。アーシャは「**死んでも可(い)いわ**」※と言った。聞き取れるかどうかの小声だった。

※ロシア語の原文では、「私は(or私の)――」とあるだけになっているところを二葉亭四迷はこう訳した。巷間、ここには“I love you”相当の言葉があったとする説があるが、間違いであろう。

類似のエピソードは、翻訳者を夏目漱石に換え、漱石が英訳の講義中に、“I love you”を直訳する愚を指摘し、「むしろこういうときは『月がきれいですね』と訳すべきだ」と話したという“伝説”がある。が、その伝説も疑わしい。少なくともそんな著述はない。本欄の注釈者の考えでは、こういう場合の女性(アーシャの場合17歳)は、絶句するか、命がけになるか(そんな状況を表現するという意味では二葉亭四迷の訳は適訳である)、のどちらかであろう。『月がきれいですね』のような小粋で洒脱な言葉は出ないと想像する。

私はアーシャを抱こうとしたが、その瞬間、ガギンのことを思い出すと、心が変わってしまった。私とアーシャが逢うことを兄ガギンが知っているが、それはなぜ？、と、アーシャに訊いてみた。なんと無粋で、なんとアーシャを責めることになる質問だったことか！ アーシャは、それに「いまから、自分はここを発たなければならないので。そのご挨拶に、です」と答えた。「私があなたと別れるのがつらいのをあなたは知らない。それをあなたは察しないのか」と私は身勝手なこと言ってしまったが、今度はアーシャは「何故兄にお話しなされたの？」と私を不審がった。私は、その言葉を受けて、また心にあらぬ言い返しをした。「なぜ、あなたはあわてたのです？ 私の心がそれ出したわけでもなく――」私はそんな詰まらぬ理屈を持ち出して、かえって自分にいらだちを感じていた。そして「とにかくもうだめだ」と言ってしまった。アーシャは「私が兄に話したのではありませんわ。兄が自分で感じたのだでしょう」とおろおろした声で応えた。私は「とにかくあなたは取り返しのつかないことをしたのだ」とたたみこんでしまった。このとき、私は私で自分の言っていることの愚かさが分っていたのに、それに歯止めをかけられなかった。アーシャはすっかり顔を赤らめてしまい、目に涙をためていた。そして、突然ドアから外へ出ていった。

フラウ・ルイゼは眉を吊り上げた表情をしていた。私は、しばらくたってから冷静さを取り戻しれから激しく後悔した。その後、アーシャの行方を追ったが、姿をとらえることはできなかった。仕方なく、ガギンの家をたずねたが、彼女は家にも帰っていなかった。事情を話しガギンにも探してもらった。大分の時間、方々を探したが、彼女の行方は分らず、私は不安になった。再びガギンの家に戻ってきたとき、アーシャももどっていた。兄ガギンの計らいで、私は今夜はこのまま自宅へもどることにした。私は、眠れぬ一夜を過ごしたのち、翌朝6時に彼らの家に急いだ。すると管理人の老婆が掃除をしていて、二人ならさきほど、発っていったと話してくれた。ガギンから私あての手紙があり、それには、ただ彼が出立の事情を書いているだけで、アーシャの言葉はなかった。私は、「人を馬鹿にしている。誰の許しで彼女を奪っていったのだ！」と怒りを虚空に向けてぶつけた。老婆によれば、朝6時発の船でケルンへ向ったようだとのことだった。私が、呆然と歩きながらフラウ・ルイゼの家を通りかかると、彼女がいやらしい笑顔で私を呼び止めた。そして少々嫌味な言い方で、アーシャからの手紙を渡してくれた。それによると、「昨日は取り乱して出していまい申し訳ありませんでした。それは口惜しきゆえではなく仕方のないことと思います。ただ、そのときあなたから一言お言葉※があれば、私とても心をかたくなにすることもなかったでしょう。しかし、それもございませんでしたので是非ありません。かえってこれで互いに良いのかもしれない。これにて永のお別れといたしましょう」

※ **二葉亭四迷の訳文(明治29年)**

最早かさねては御目もじえ叶ふまじと存候ままお暇乞うまでに一筆書き残しまゐらせ候 此度俄かに出立いたし候はさらさら口惜しき故にてはなく唯詮方なきままにござ候 昨日はづかしくも取乱したる様を御目の懸け候をり只の一言仰せ下され候へば私とても心強きは帰宅せざりしをと存候へどそのをり何の仰せもなかりしは是非もなき御事に候 されどその方反てお互いさまの身のためかも知れず候 今は永のお別れに候 かしこ

私は、「只の一言」さえも言えなかった自分が情けなかった。野原に出て無念を言い散らした。その日のうちに此の家を出てケルンに発った。もちろんで彼女の姿を見ることはできなかった。私は、アーシャを失ったからといって、いつまでも憂鬱を抱えているわけではなかった。むしろそれでいいと思っている。「あんな女といっしょになってはおそらく幸福ではあるまい」と思って自分の心をなぐさめた。その後女性と交際することはあったが、アーシャのときほど蕩然とはならなかった。今は妻も子もなく一家をなすずに少し寂しい気はする。アーシャの手紙と、今では枯れてしまったがアーシャが投げてくれた風呂草の花とはいまでも持っている。私も今は老け込んだ。はかない草花のかすかな香りでも、人の喜憂よりは永く保つものだ。

○ある感想

旅先での、いわゆる“行きずりの恋”がテーマになっている。日本で昭和30年代に流行った「赤いランプの終列車」(春日八郎)のイメージに近い。でも、人生にこういう恋とその結果の悔いがあることは、多くの人において(私も含めて)ある事実だろう。この作品はそういう人の慰めになっているだろう。二葉亭四迷の名訳(“超訳”)もそれゆえかと納得できる。